ベストピア
Bestopia
2020年9月号
第403号
bestopia.jp
パリ通信
第105号

夏目漱石入門

今、読書会で「我が輩は猫である」を、苅部幹央先生のご指導で読んでいます。多くの人からは今更と言われそうですが、「ねこ」に関わらず漱石の作品は、よほどの教養と教育がないと一人では読めないことを実感しています。私にとっては導き手無しで前に進めない世界です。予習をするために、坦懐に初心に戻り「13歳からの夏目漱石」（小森陽一著・かもがわ出版）を読むことにしました。

この著を選んだのは全くの偶然といいますか、大いなる誤解によって、少々苦労して入手したものです。漱石の著作をインターネットで調べているとどれを選んでいいか分からないほど数は多いのですが、私は前著を「13歳までの夏目漱石」と読んで飛びついてしまいました。生まれながらの無鉄砲のなした業でしたが、入手して、驚いたことはこの著が長野県の小学生から高校生を聞き手として行った授業にもとづいているとのことでした。（2016年8月11日長野市生涯学習センター）

私の読書の仕方は作品を読む前に、なんらかの解説書を読み、なんらかの情報をもとに、しかも、その情報には影響されずに作品に入るという方法をとっています。今回も「漱石深読」「漱石激読」にも目を通して、自分の弱さを補いながら、漱石の文章に馴染んでいるところです。

この読書会は10年以上続いている伝統のある会ですが、私はまだ2年生の新米です。幸いなことに、その作品が「「道草」」の途中からでしたので、漱石の伝記に触れることができました。親切なご指導で、行間にこめられた漱石の考えや歴史的背景を説明して頂くことで、作者にだんだんと親近感を覚えるようになりました。

私にとっては2冊目になる「我が輩は猫である」もその時代背景と漱石の心理状態等の説明があって、一行目だけでも相当の時間を要しました。
「我が輩は猫である。名前はまだ無い」私は猫が好きではなかったので、この本は読んでいませんでした。この機会がなければ漱石の世界に深入りすることはなかったと思います。読み出すと、そう簡単ではありません。まずアンドレア・デル・サルトとう絵描きが登場します。ここで調べないと先へ進めません。今ではPCで簡単なことは調べられますが、読書の中断はしばしば生じます。知らないことが多すぎると、この繰り返しです。

「草枕」を読みますと「ミレーのかいた、オフェリアの面影」が忽然と出てきます。

ここでも教養の質量が問われます。晩鐘のミレーではない。ジョン･エヴァレット・ミレーの作品でロンドンのテート美術館にあります。漱石が留学してこの絵を絶賛して以来日本でも有名になったと言われます。私も10年程前にロンドンに行き探し当てた思い出のある絵です。「草枕のくだりを記します。

「オフェリアの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧と胸の底に残って」（新潮文庫版p28）「水に浮かんだまま、或いは水に沈んだまま、或いは沈んだり浮んだりしたまま、只そのままの姿で苦なしに流れる様子は美的に相違ない。それは両岸に色々な草花をあしらって、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣装の色に、落ちついた調和をとったなら」「流れて行く人の表情が、まるで平和では殆ど神話か比喩になってしまうーーー」（前掲p90)

これだけ漱石に書かれると有名になるのはごく自然のなりゆきで、ロンドンを訪れる日本の教養ある人々は我先にと訪問したに違いないと思われます。

ところが、これまた芸術のなす技とでもいえる観る人のイメージに置き換えられ易い絵でもある。観ると引き込まれるような美しさと神秘的な何かを感じたことを私も思い出したのですが、よく見ると、絵の中のオフェリアは笑っているようであり、両手は開いており合掌はしていない。ただ、日本人が観ると一目で合掌している雰囲気のある絵であるから不思議です。漱石もそう感じて伝承してきたのです。（この話はどなたか有名な方も指摘しているようですが、その本の名前を思い出せません）

漱石の芸術論とも言われる「草枕」

「芸術は、われ等教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を避け正に就き、曲を斥けて直にくみし、弱を扶け強を挫かねば、どうしても堪えられぬという一念の結晶して、燦として白日を射返すものである。（前掲書p155)

Wikipediaでは「この絵はちょうどオフェリアが溺れる前、歌いながら川に浮かんでいる姿を描いている。この絵は『ハムレット』第4幕第7場で王妃ガートルードの台詞の中で表されている
描かれたエピソードは舞台上では見られず、ガートルードのせりふにのみ存在する。
「（前略）すてきな花輪を、垂れた枝にかけようと、柳によじ登ったとたん、意地の悪い枝が折れ、花輪もろとも、まっさかさまに、涙の川に落ちました。裾が大きく広がって、人魚のようにしばらく体を浮かせて――――そのあいだ、あの子は古い小唄を口ずさみ、自分の不幸が分からぬ様子――――まるで水の中で暮らす妖精のように。でも、それも長くは続かず、服が水を吸って重くなり、哀れ、あの子を美しい歌から、泥まみれの死の底へ引きずり下ろしたのです。」
オフィーリアの死は、文学の中で最も詩的に書かれた死の場面の一つとして称賛された」

顔の横に、首の回りに、彼女自身を飾るように花が水面に浮かんでいます。
バラは“若さ、美貌”を、忘れな草は“思い出”を、
ひな菊は”純潔”を、パンジーは“叶わぬ恋”を、
ケシは“死”を、スミレは“誠実、早死”を
オフィーリアに相応しい花言葉が散りばめられています。

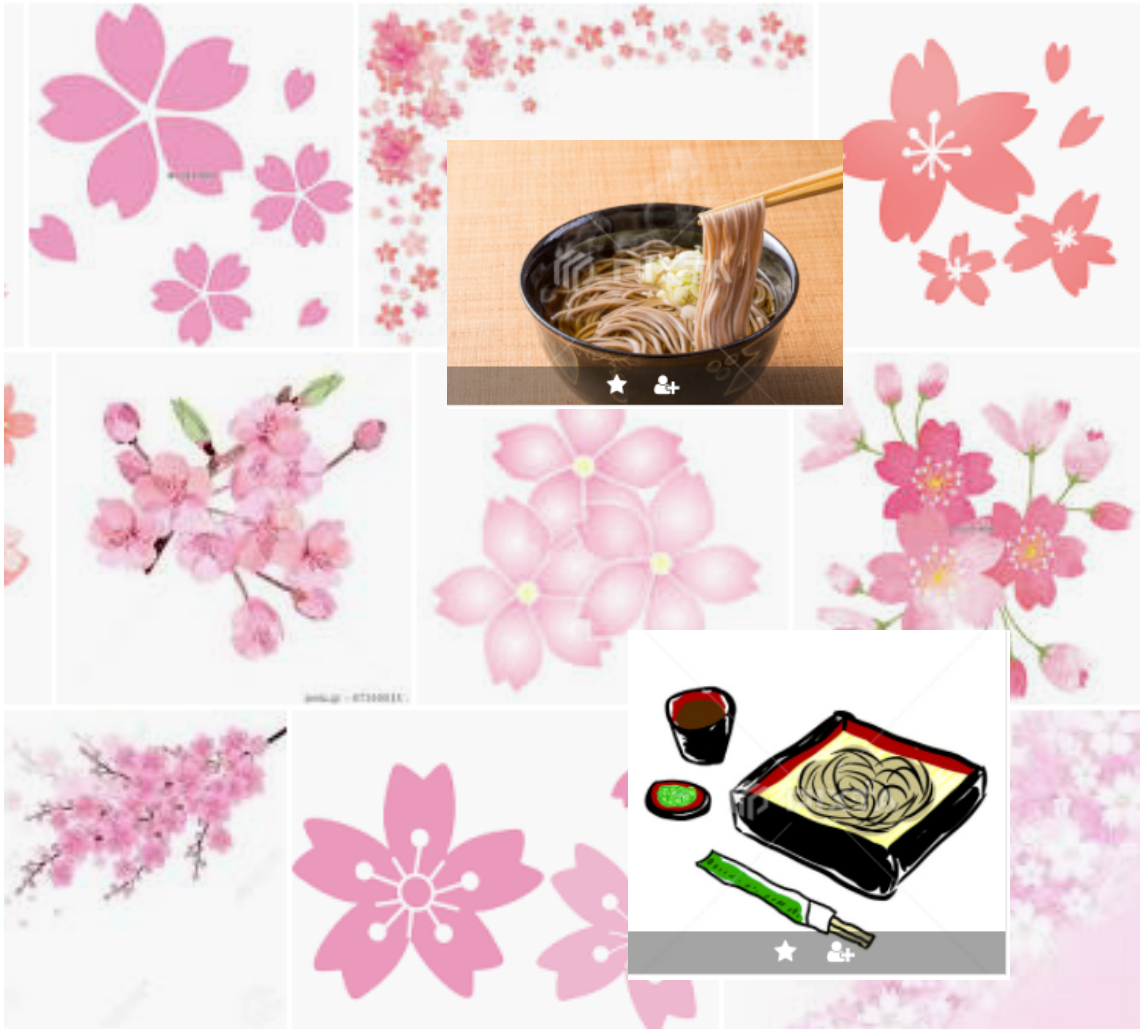
ここまで解説をすると漱石から脱線することになりそうですが、ともかく不思議な絵です美術館を巡るとふとして自分にあった名画（迷画）に出会うのも旅の楽しさでした。

「草枕」は漱石の文明論のような感じもします。
「文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏みつけ様とする、一人前何坪何合かの地面を与えて、この地面の内では寝ることも起きることも勝手にせよというのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵を設けて、これより先へは一歩も出てはならなぬぞと威嚇すのが現今の文明である。中略。文明は個人に自由を与えて虎の如く猛からしめたる後、これを檻穽の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたらーーー世は滅茶苦茶になる。(「草枕」p175)

この文脈の関係から、漱石の権力と金力の定義を見てみると、近代文明の底に潜む構造がより鮮明になります。

「権力」とは「自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に圧し付ける道具」
「金力」とは「個性を拡張するために、他人の上に誘惑の道具として使用し得る至極重宝なもの」と規定して、現今の社会における人間関係の根底に「金力」が働いて、それが「人間の精神」を売買し、「人間の徳義心」と「人の魂」を「堕落させる道具」として機能していることを明らかにしています。これは大正14年11月25日の講演の一部ですが、今の日本の政治を赤裸々に指摘しています。眼下の政治献金問題はどう決着するのでしょうか

「もりかけさくら」という美しい我が国庶民の文化を総理大臣夫婦によって悪徳の泥をあびせられたままで終わるのでしょうか。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」（草枕）だが「坊ちゃんの」ように「勧善懲悪」は空言のようです。

次回は「漱石の家計簿」にチャレンジします。